



ショートコメント

★★★

Data 2022-12-1

監督・脚本・プロデュース・
 音楽・編集：二階健
 出演：小川紗良／永瀬正敏／
 HYDE／Marius Aubron
 ／Manon Aubron／マメ
 山田／大久保千代太
 夫／松代沙織

ファンタスマゴリー ザ・ゴーストショー

2021年／日本映画
配給：Nikaism Film Factory／71分

2022（令和4）年11月1日鑑賞

シネ・リープル梅田

👁️👁️ みどころ

「ファンタスマゴリー」って一体ナニ？映画の始まりは幻燈ショー。まずは、そこから勉強すれば面白いが、ある日ヒロインが入った謎の骨董店で見た怪奇幻燈ショー「ファンタスマゴリー」とは？

テーマは良し！映像や美術も良し！また、ヒロインの演技力もオツケーだし、永瀬正敏の存在感もOK。しかし、肝心のストーリーは？

冒頭に見た、ヒロインの顔の半分にできた痣は、何故ラストには消えてしまったの？それも含めて、本作の説得力をあなたはどうか考える？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

◆本作の邦題になっている「ファンタスマゴリー」って一体ナニ？それは、18世紀末にフランスで発明された、幻灯機を用いた幽霊ショーのことだ。ベルギー出身の物理学者がパリで行った興行によって有名になり、ヨーロッパとくにイギリスで、19世紀を通して流行したらしい。幻灯機によって、壁、煙、半透明の幕に画像を映写したが、後ろ側から映写したり、幻灯機を動かすことで画像を動かしたり、複数の幻灯機を使用することで画像の瞬時の切り替えを行ったり。映写されたのは、骸骨、悪霊、亡霊などの画像で、降霊術と深く関わるものだったらしい。

本作を、監督、脚本、プロデュース、音楽、編集した二階堂健氏の説明によると、ファンタスマゴリーとはマジック・ランタン（幻燈機）を用いた「動く絵」のゴーストショーだ。『映画の原点「ファンタスマゴリー」を現代に蘇らせる！』を題した彼のブログでは、「プロジェクトをやると思った理由」等が詳しく解説されているので、これは本作鑑賞の副読本として不可欠だ。

◆本作は脚本も二階堂氏が書いているがストーリーは極めて漠然としたもので、いわばストーリー自体がファンタスマゴリー・・・？導入部で、東京でCGクリエイターとして働いていた若い女性、エナ（小川紗良）が故郷の京都に戻り、鴨川でスケッチをしたり、オ

オーナーのジノ（永瀬正敏）がいるカフェで日々を過ごしているところからストーリーが始まる。ある日不気味な衣の被り物をした男ロベルトソン（HYDE）と出会い、誘われるまま謎の骨董店に入り怪奇幻灯ショー“Fantasmagorie”の世界を垣間見たところから、ファンタスマゴリーの世界に入っていく。

◆『映画検定公式テキストブック』（キネマ旬報映画総合研究所 編）で学んだところによれば、映画の誕生に最も重要な役割を果たしたのは、フランスのリュミエール一家が発明したシネマトグラフ。しかしそれ以前にも、1780年代には、ロンドンで影と光を巧妙に展開させてミニチュアが動いたように見せる影絵ショーが公開されていた。また、1894年には、発明王エジソンの助手のディクソンが開発した、大きな箱の中にフィルムを装填し、覗き穴からフィルムそのものを拡大鏡で見るキネストコープが公開されていた。ちなみに、私も子供時代に父親が操作する幻灯で「アリババと4人の盗賊」等を観て興奮したことをよく覚えている。

そんな世界をテーマにした本作のような映画は私には興味深い、「これはすごい！」と思わせるためには、それなりのストーリー、それなりの脚本が必要だ。しかし、本作は、監督、脚本、プロデュース、音楽、編集としてひとり数役の働きをする二階健氏の奮闘にもかかわらず、ストーリーはイマイチ。また、永瀬正敏がパズルに夢中なカフェのオーナーとして、それなりの存在感を発揮するものの、その意義は限定的。したがって、総合点としての本作の出来は、せいぜい星3つ。

2022（令和4）年11月11日記